

めでいかすどる
Médicastre



「 盛夏の弥陀ヶ原湿原 」

鶴岡地区医師会

18年 8月号

『 機能性ディスペプシア (functional dyspepsia) へのアプローチ』

藤田保健衛生大学 坂文種報徳會病院 内科（心療内科）
教授 金子 宏 先生

慢性の上腹部愁訴（dyspepsia）があるにもかかわらず、その症状を説明できる器質的疾患・代謝性疾患が見つからない場合、消化管の機能異常である点を重視して機能性ディスペプシア（functional dyspepsia：FD）、あるいは「機能性胃腸症」と呼ばれるようになってきた。その高い頻度、QOL への影響、病態理解の進歩、消化管運動改善薬の登場、慢性胃炎の包括医療を考慮した再編の動きなどが FD をクローズアップさせる背景といえる。FD の病態には消化管運動異常、消化管知覚過敏、胃底部適応性弛緩障害という機能異常が関与していることが明らかである。また、その機能異常を脳で不快な経験として知覚（認知）し、その反応がさらに消化管機能異常を悪化、慢性化するという脳-腸相関（悪循環）の関与が注目されている。さらに、心理社会的因子が症状を修飾する。

FD の世界的教科書ともいえる Rome 基準が 2006 年 4 月に改定され Rome III として公表された。

ディスペプシア症状が煩わしい食後膨満感、早期飽満感、心窩部痛、心窩部灼熱感と限定され、そ

のうち一症状以上が慢性的みられ、かつ器質的疾患が除外された場合に FD と診断される。

治療としては「機能的な病気もあること」を十分説明することと消化管運動改善薬（ガスモチン® など）の投与が第一段階である。2006 年 4 月に FD に対するガスモチン® と胃炎治療薬であるテプレノンとの大規模比較試験（JMMS）の結果が公表され、2 週間の投与によってガスモチン® が胃もたれ感のみならず、胃の痛みにもテプレノンよりも有意に有効であることが示された。2～4 週間消化管運動改善薬を使用しても改善がみられない場合は内視鏡を含む精密検査が勧められる。その際、H2 ブロッカーを試す価値もある。難治性の場合は使い慣れた抗うつ薬等を 4 週間程度使用して反応をみるのが実践的であろう。

私のお勧めの店

その 10

横 山 靖

みなさんは河鹿ガエルをご存知だろうか。清流に棲み、とても美しい声で鳴くカエルである。夏の暑い午後、温海川の川辺で聞く河鹿ガエルのさわやかな鳴き声は一服の涼をもたらしてくれたものだ。今日のお勧めはこの河鹿鳴く温海川の川辺にある食堂『河畔（かはん）』さんの冷やし中華。食堂は名前のとおり河の畔（ほとり）にある。川辺ということもあろう、また温海川に沿った桜並木の木陰になり夏でも店内は涼しく窓を開ければ、美しい河鹿ガエルの声が聞こえてくる。こんなロケーションの中で食べる冷やし中華は格別で、時間が止まったような静かなひとときを過ごすことができる。私はすっぱい冷やし中華が苦手、この『河畔（かはん）』さんのやや甘めでまろやかなスープが好きである。酸味は軽く、何より酸特有の刺激がないところが素晴らしい。これほど調和のとれた冷やし中華のスープはない。麺は完全な平麺で、この平麺にスープをよくからむのだ。具は白髪ネギにキュウリ、トマト、ノリ、紅ショウガだが、特筆すべきはボローニャ風のソーセージが2枚載っている。このソーセージが冷やし中華のスープと実によく合う。冷やし中華といえばチャーシューやハム、蒸し鶏などを使うのが一般的であるが、このスープには、絶対このソーセージでなければダメだ。夏でも温かいラーメンが好きという方は、なんとといっても五目ラーメンがお勧めできる。白濁したスープはとんこつ風だが、もっと洗練されていて違うように思う。何より決して豚骨臭くはない。この辺は企業秘密だろう。温海温泉ともなれば地理に詳しくない人もいると思う。温海温泉の入り口にY字路があり、そこを川沿いに進む。温海温泉には3つの橋があり、海側から湯の里橋、葉月橋、月見橋である。1つ目の『たちばなや』のある湯の里橋を過ぎ、『萬国屋』が見える2つ目の橋の葉月橋から150mぐらい上流にある。ちょうどグランドホテル

のある月見橋と葉月橋の中間のあたりである。せっかく温海温泉に来たなら、食べた後にあたりを散策するのもよいだろう。河鹿ガエルの涼しげな鳴き声を聞きながら葉月橋方向に100mほど戻れば、足湯付きのカフェ『チョット・モッシュエ』がある。夏なら足湯につかり、冷たいアイスコーヒーを飲むなんていうのも一興である。あるいは山側の月見橋方面に50mほど進み、左に曲がればバラ園に続く熊野神社の参道の階段が見えてくる。丘の上のバラ園からは温海温泉が一望できる。冷やし中華だけではお腹がいっぱいにならない人がいたら、月見橋を過ぎ、さらに歩くと蕎麦のおいしい『大清水』さんがある。お店の横には店の名前の由来の清水があり、冷たい水がコンコンと湧き出ている。ここには作家の横光利一が逗留したことを示す碑がある。清水のあるあたりはスギの木立に囲まれ、夏でも冷んやりした大気に包まれ気持ちの良いものである。

河 畔

住 所 鶴岡市湯温海甲 162

T E L 0235- 43- 3113



冷 や し 中 華

納涼ビアパーティー

去る7月28日(金)、恒例の医師会納涼ビアパーティーがグランドエル・サンにて開催されました。当日はあいにくの雨模様でしたが、それでも参加者は過去最高人数の398名となりました。総合司会の福原晶子先生の進行のもと、石原良先生の開会の挨拶、中目千之会長の挨拶、横山靖先生の乾杯で宴は始まりました。

余興は湯田川温泉リハ病院、みずばしょう、健康管理センターの3施設の新人職員と、今年は黒羽根整形外科・上野整形外科・黒澤眼科の3院の従業員の皆様方の合同チームでの歌とダンスが行われ、会場を大いに盛り上げてくれました。毎年恒例の理事の先生方による『サライ』の大合唱は行われませんでした。それでも参加者の皆様方には大いに飲んで楽しんで頂けたようでした。

最後に、400名近い出席者数となりましたが皆様のご協力によりスムーズに進行することが出来ましたことを心から御礼申し上げます。
(実行委員長 高橋 巧)





7月28日、初めてビアパーティーに参加しました。新入職員にとってビアパーティーといえばやっぱり余興です。今年は過去最高の参加人数ということもあり、始まる前からかなり緊張しましたが、本番が近づくにつれて逆に吹っ切れた感じになりました。そのせいもあってか、自分自身満足のいく踊りができたし、この余興を通じて他の職場の新入職員と繋がりを持つことができ何よりも良かったです。ただ来年こそはもっと気楽に楽しみたいと思います。最後に、実行委員の皆さん本当にお疲れ様でした。

(人事経理課 渡部 淳美)

マイペット&マイホビー

—第36回—

戸田 聖一

わたしの愛した小さな命たち

吾が国には「もののあわれ」という言葉がある。

日本人の特有な心の動きを表した言葉と思えるが「物の哀れ」と漢字が二字入っただけで心にひびいてくる意味合が何となく異質なものに感じられるのはなんとも不思議である。「もののあわれ」とは人間の悲しみ、哀しさ、見窄らしさなどを表したのではなく、これらに伴ってくる生きとし生けるものの心の微妙な機微を捉えた胸に「ジン」ときてそして何か甘酸っぱい味わいのするしみじみとした情感を云うものであろう。ある意味では幽玄の世界に通ずる言葉であろうとも思われる。

小生は子供の頃よりすずめ、十姉妹、モズ、カラスなどの雛をとってきては鳥籠などには入れず放飼いにして馴らしたものだ。開業してまもなく小生は数匹の文鳥とインコの幼鳥を飼育てた。文鳥は小生の医局に放飼いにした。インコは本をかじってぼろぼろにしてしまうので家においた。飼いはじめ文鳥たちはまだ赤児、家でエサをやり車に乗せて診療所へと、成鳥になるまで自宅との往復の毎日であった。どうもやつらは小生を親と思っているらしい。成鳥になってもしばらくは小生の肩にとまりしばらくの間は自宅と診療所を行き帰りしたものだ。五羽の文鳥の中に一羽雄がいた。白いのは皆雌である。一羽の雄を小生は「ダッコチャン」と名付けた。寒くなると小生の手の中で眠る癖がついてしまったからだ。昼時小生の昼めしが運ばれてくると大変だ。先に食するのはこいつら五羽である。どんぶりや皿の上にとまり喰い散らす。

小生はそのあとでこいつらの糞をどけながら

昼めしを食べる、こんな日が毎日であった。しかし可愛いものである。「ダッコチャン」は小生の下唇にとまり歯の掃除をしばしばしてくれるのである。

初夏のある日、ある人がカラスにおそわれ巣より落下したカワラヒワの幼鳥を持ってきた。命には別状はないが両脚がダメらしい。一応小生が育ててみることにした。「ゲゲチャン」と名付けた。とんでもない闖入者である。野生の鳥は生まれて後親鳥の銜えてきた小虫などを餌として生長する。小生は生き餌ミルウォームと魚の摺り餌と牛乳を混ぜ合わせたものを日に数回与え育てた。診療の合い間に母鳥の役目は少し大変であった。「ゲゲチャン」にとっては幸なのか不幸なのか今もって不明。

障害児であるのに本人はいっこうに気にする様子もなく。ギクシャクしながら羽毛の中に黒っぽいアイシャドウをつけたような瞳をパチクリさせながら医局の中を翔びまわれるようになった。ある日突然奇妙な声で囀り出した。

雄である、小生の医局には「ゲゲチャン」を入れ六羽となった。「ダッコチャン」はマンガの中からこの世にとび出してきたような剽軽な可愛いやつであるがしかし悲しいことに、本人は交尾の仕方を知らない。雌鳥たちに毎日のっかっちはみるものの頭の方へ尻を向けてのっかったのは交尾はもはや無理。小生も何とかしようと思ったがそれは無理、思わず笑ってしまうが何故か哀しい。しかし四羽の文鳥は毎日のように未受精卵を生み続ける。

「ゲゲチャン」は囀っては縄張りを主張している

のであろうが別にいじめられることもなく不思議な関係が続いている。白でないもう一羽の色物の文鳥がいる。小生が楊子を使っていると、目敏く見つけ翔んできて小生から楊子をうばいしゃぶったり、クルクルまわしたりしばらく遊んでいる。映画に出てくる「もんじろう」からとって、楊子を口にくわえることからこの一羽を「モンチャン」と名付けた。

いつ日か定かではないが吾が闖入者「ゲゲチャン」は白の雌文鳥の一羽「ザウルス」に惚れたらしい。国境をこえた恋である。一億数千万年前ジュラ期に生息していたステゴザウルスにこの一羽はその風貌が似ていたから「ザウルス」と名付けた。「ザウルス」もせっせと未受精卵を生み続けるが「ゲゲチャン」は巣ごもりをする「ザウルス」にぴったり寄りそって離れようとはしない。「ザウルス」はそのたび毎に「ゲゲチャン」を追い払う。

追い払われても追い払われても「ゲゲチャン」は藁の巣のそばにぴったり寄りそっていっこうに離れようとはしない。惚れた弱みか。ヒワと文鳥の間には人間には分からない種というものの何らかの壁があるらしい。

小さな命達の毎日することを見ていると、純粹で一途なもの、時には哀しげなもの、時には滑稽な事柄をしみじみと感じざるを得ない。

作為がなく、ごく自然のまま生きている。何か教えられるものがあるのと同時に、吾が人生の拙さを思い知らされる。短い命を生きとし生きて、次から次へと小生のそばで死んでいった。誠に辛い思いであった。小生はそろそろ古希に手がとどかんとする。もはや生き物を飼い終える年でもあるまい。小人閑居しての雑感である。



右 ダッコチャン
左 モンチャン



まん中 ダッコチャン
右はじ モンチャン



ゲゲチャン

エー（A）会員になりました

—新規開業医紹介— No. 5

三川病院 錦織 靖

平成17年2月1日に、三川病院を開院させていただきました。その前に平成14年4月から三川病院開院まで、酒田で錦織医院をしておりましたが、こちらは三川病院開院とともに閉院しております。本籍は島根県で、父は医者ではないのですが、祖父から上7～8代くらいは医者をしておりました。江戸時代の最後の頃の残っている記録では、本道二番手藩医学校指南役で、全国的に見れば大したことはないのですが、個人的には医者の家系で良かったと思っています。父は医学部に進学したのですが、半強制的に進学させられたためか、父の学生時代に祖父が亡くなると、次男であることもあってサッサと退学して、別の道を選びました。しかし、私は医者になっている親戚を見て、やはり医者がいいなと感じ、この道を選びました。山梨医科大学を卒業し、東京医科大学精神医学教室に入局させていただき、個人的な紹介で酒田の山容病院に、平成10年に当初2～3年のトランクのつもりで入職しました。すると、庄内の風光明媚な自然や、春、夏及び秋の素晴らしさに気がつき、「どっか行かないで」と言って下さる患者さんも出てきて、それならば自分の責任の持てる診療体制・運営体制で診療したいと考



診療時間 9:00～12:00
14:00～16:00

休診日 日・祝・土 午後

えました。幸い、常務理事で入社して下さった中島副院長を始めとする皆様方の応援を賜り、当初なんとか48床の老人性認知症疾患治療病棟（精神病棟の一種）で開院させていただい

て現在に至っております。現在の老人性認知症疾患治療病棟のみでは、数量的にも診療体制的にも不便があり、幸い県のご許可もいただくことができましたため平成18年6月末より増床工事に入っております。今回増床では、精神療養病棟48床と一般療養病棟（医療）48床を予定しております。完成後の病棟運用開始は来年（19年）3月を予定しています。そして、なんとか看護職員が集まって下さることを祈っているところです。また、その頃にご紹介患者さんがいらっしゃいましたら、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

趣味は、動力滑空機の操縦、二輪車、テニス等



でしたが、動力滑空機と二輪は現在家内に止められており、テニスはまだ何年もしていないため、いきなり再開すると心筋梗塞を起こしかねないため気が重くなり、趣味でストレス解消をし難くなっております。せめて、来年くらいには二輪車くらいは解禁してもらおうと交渉中です。

私は医者への道に進むことができましたことを大変嬉しく、かつ誇りに思っておりますため、初心忘れぬよう心して診療に当たりたいと考えております。

今後とも、何卒ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



表 紙

「 盛夏の弥陀ヶ原湿原 」

石 原 融

弥陀ヶ原湿原は月山高原ラインの終点の月山八合目にあり、誰でも気軽に散策できる場所です。この写真を撮った日は、前日までの雨が上がり晴れましたが、まだ強い風が吹いており、真夏の山にはめずらしく清々しい感じの日でした。黄色い花は夏の高山植物の定番であるニッコウキスゲです。

～ 編集後記 ～

五十嵐 裕

基幹病院の過重労働は大きな問題であります。そもそも日本の救急医療体制には大きな問題があります。今の病院の当直医というのは時間外の院長の「代理業務」を行うことが本来の役割なのに、救急医としての役割を押し付けられているという制度上の問題があると思います。私が学生だった頃はもちろん現在も多くの大学病院で救急医を養成する講座はないのが現状です。学生時代に救急医療の教育は受けていないのです。

救急医療の理想は、「外科」や「内科」と同じで救急医学を学んだ専門医が担当し、必要に応じて各科の専門医に引き継ぐことと思われまふ。ところが日本では救急救命センターのある基幹病院ですら救急専門医はいなく、いても十分ではないようです。しかし、市民はそのような現状は全く知りません。万能の医師が当直していると思っているようです。また最近の「権利意識の向上」もあって単なる「感冒」でも「最高の医療水準」を求め、対応が悪ければすぐ投書されます。「夜間診療所」と勘違いしている「権利意識」の旺盛な「急患」の増加で病院の当直は気が抜けなくなり一睡もできなくなります。救急医を養成し救急医療を片手間ではない「本来の救急医療」を作り上げることは国の責任と思いますが費用のかかる制度を作ろうともしません。

医師会は勤務医の過重労働の問題把握のため意見を求めるヒアリングをおこなっています。わざわざヒアリングしなくても医師会が貢献できることは考えればわかるはずです。休日診療所を充実して少しでも多くの軽症例を看ること、これが医師会ができる唯一の具体的貢献だと思ひます。医師会が日曜日の小児科救急をやり始めてからその時間帯の荘内病院の小児救急の数が減少したとの具体的な結果を聞きました。病院の過重労働に対する問題認識はあるようなのでなんとか制度を構築したいものです。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・斎藤憲康・五十嵐裕・福原晶子・岡田恒人

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町 1- 34

TEL 0235- 22- 0136 FAX 0235- 25- 0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町 27- 1 TEL 22- 0936(代)